

# 豊明希望チャペル礼拝

2026/6/28

「喜んでそれを行いなさい」

ローマ人への手紙 12 : 6~8

ローマ人への手紙から教えられていますが、11章までが論理篇ということで、12書からは、その実践編という内容となっております。

その実践という内容においては、教会の内外の様々なシチュエーション、外という点においては、この世の権力、たとえばローマ帝国に生きる者として、あるいは、奴隷という立場、あるいは、奴隷を待つ立場、そんな当時の時代に即した、きわめて実践的な内容に及んでいます。さらには、そもそも、その実践の、実践的な心構え、例えば、愛とは何か、慈善の心構えなど、多岐にわたる、たしかに極めて実践的な内容になっています。パウロは、ローマという地に置かれたクリスチャンのことを思い見ながら、その気持ちに寄り添い、一人一人の疑問と課題に、自ら立ち向かって、共に解決しようとする、丁寧な内容になっています。

今日の箇所は、前回の5節までの、実践の前提というような内容から、いよいよ具体的な内容に入ってきました。全体にわたって、言葉を追いながら見ては行きたいですが、まずは、一つの注目点に触れるところから始めたいと思います。今週の聖句とした8節です。

**「12:8 勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれを行いなさい。」**

特にこの言葉に注目します。**慈善**です。日本語的な意味では、慈善活動、仕事とは別に、ボランティアの奉仕というような意味で、使います。貧しい人や、困っている人、この世で弱者と言われる人を支援することです。ギリシャ語(エレオー)は、憐(あ)われむ、同情する、そして、あわれみを行為によって示す、すなわち慈善。と出てきます。



さらにさかのぼると、ギリシャ、ローマ社会では、**ボランティア**という、「**義勇兵**」「**志願兵**」を意味する起源を持ち、また、vol(奴隷)の複数形で、奴隷兵とも訳し、参戦することで、奴隷が解放された歴史に起因すると解釈されることもあります。この12章の後半まで行くと、慈善が、まるで、悪と戦う善の戦闘、戦争であるかのごとくパウロが説明するとき、何か、自分の余裕のある時間に行う慈善

とかよりも、キリストの戦士として、断固、慈善を行うと誓って、喜ばれても、そうでなくても、評判を受けようと、嫉妬を受けようと、誰かのためというより、御言葉に生きる者として、キリストに従う者として、神のために行う、まさに命をかけた兵士のような心構えであるかのように語りますから、それは、クリスチャンのついでで

はなくて、クリスチヤンの生き方、赦され生かされている者としての、応答、あるいは存在意味そのものとして語られていることを最初に確認したいと思うのです。

2024年元旦に起きた、能登半島地震(死者498名、住家被害は全壊11万棟)から、約2年半が経ちました。ふり返れば、阪神淡路地震(1995年1月)、三陸沖地震(東北地方太平洋沖地震2011年3月11日)と、ほぼ10数年おきに大規模な地震を経験しました。次は、2030年後半となるでしょうか・・・



この数十年の災害の歩みをみると、阪神淡路地震は、日本のボランティア活動の夜明けと言われ、その主導者の一つに、キリスト教会であったように思います。(←阪神淡路大震災当時のクリスチャン新聞『教会拠点に被災者支援』1995年1月25日発行)

16年後に起きた東北地方太平洋沖地震の数年後に、福音同盟(JEA)から、東北地方太平洋沖地震においても、教会のボランティアについての報告書が出て、キリスト教会のボランティア活動の総括がされ、こんな報告がなされました。「さて、震災直後から、キリスト教界は支援活動に乗り出した。阪神、淡路大震災の年は、ボランティア元年と呼ばれたが・・・今回のボランティア活動でも評価すべきは、教派を超えた働きがなされてきたことである。・・・」この報告者は、日本ホーリネス教団の先生ですが(上中栄)、「中越沖地震の際、教団所属の教会が倒壊した。そこで驚きまた恥じたのは、交わりのない教派の見ず知らずの牧師、キリスト者が、我々の教団のために働いているということであった・・・」と。またもう一つの特徴として、このようなことを報告しておられました。「もう一点、(キリスト教界の)地域社会のための支援活動を、伝道の『材料』としなかったことも評価できる。かつて、震災は神の裁きだと言ったり、伝道のチャンスだと言った牧師がいた。この感性、この福音理解は何なのかが、10数年前の筆者の問いであった。今回も、同じようなことを言って回る団体があったが、多くの教会は、人の悲しみにつけ込むようなことはせず、ひたすら寄り添うことに努めた。」(p8)と、そのように総括しておられます。(←能登ヘルプ支援活動)



その評価は、1、教団教派を超えること。2、伝道のためではなくキリスト者の使命として。その二点が、学んだ点だと言っています。

この二点は、まさにローマ人への手紙で、クリスチヤンの行いの具体的に2点の心構えと一致しているように思います。すなわち、(1)私は、足、私は腕と、競い合うことなく、教団教派を超えて、頭であるキリストにつながっている一つの体の一部として、私利私欲を超えて協力し合うこと。(2)人でも、目に見える教会の盛況繁栄ではな

く、人の評価を超えて、キリストにつかえる使命感をもってひたむきに奉仕すべきだ  
という点においてです。

あらためて、今日の 8 節を確認します。

**「12:8 勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれを行いなさい。」**

「勧め」は、牧師、広くは、教会学校の教師などの、教会内の事。「分け与える」も、主には教会に集う兄弟姉妹にたいするもの、すなわち教会内のことではあります。指導は、教会をリードする、教会内の牧師や役員を想定します。慈善も、教会内の事が念頭には置かれているとは思われますが、そのような限定的なことばかりありませんので、まさに、この訳語「慈善」の意味するように、慈善、あわれみを必要とする人すべてと広げて、私の教会の都合ではなく、相手の立場に立って、広く、この世に対するクリスチャンの心構えの、一般的な基準と考えていいと思います。

そして、それぞれに修飾語というか、短いですが、大切な一言が付け加えられている点に時に注目したいと思います。

「・・・分け与える人は**惜しまず**に分け与え、指導する人は**熱心**に指導し、慈善を行う人は**喜んで**それを行いなさい。」です。

教会の中、あるいは外の慈善活動においても、心構えが大切だと言っているのです。心の伴わない奉仕はないと言っているのです。分け与えるにしても、惜しまずであり、指導にしても、熱心であらねばならず、慈善にしても、やってやっているだけではなく、そんな姿勢ではだめだと、喜んでやらなければ、11 章までに教えられた、信仰のみによって、すなわち、ただ一方的な恵みによって、キリストの十字架の死と贖いによってのみ救われたクリスチャンの心構えとしては、惜しまずであり熱心であり、喜んででなければ、クリスチャンの行いにはならないと言っているということでもあります。内村鑑三は、この慈善について、「浮き立つような心持ちで、快（こころよ）くなせ」と解説しました。



また、まだ教会が迫害の時代におかれていた、2 世紀から 3 世紀(教会教父時代)に書かれた、このローマ人への手紙の説教、註解が残っております。オリゲネスという人(182~251)の『ローマの信徒への手紙註解』(上智大学神学部編)です。このローマ人への手紙からは、すでに 100 年ほどが経過した時代に、当時の牧師が、教会の指導者達が、どうこの書を読み、どう実行に移しているかについて知る、非常に興味深い書です。日本なら、弥生時代ですよ。たとえば、施しをする場合、これは、この 8 節の「分け与える」に当たりますが、こう言います。「**施しをする**

**場合・・単純素朴な心でそれをなさねばならないと言うのであります。・・つまり、困窮のうちにある人々に親切にしているように見えるが、その本心は人々の称賛を求める者でないようにしなさいと言うことです。**」と。阪神淡路、東北の地震の後、「多くの教会は、人の悲しみにつけ込むようなことはせず、ひたすら寄り添うことに努めた。」という評価は、1 世紀のこのパウロの教えから、2 世紀、そして、21 世紀にいた

るまで、貫かれてきた精神であることを思うのです。そして、その精神は、イエス・キリストその方の思いであり、イエス・キリストを神とし師として歩む者に共通の生き方そのものであることを思うのです。この箇所を引用します。

マタイの福音書「6:2 ですから、施しをするとき、偽善者たちが人にほめてもらおうと会堂や通りでするように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。6:3 あなたが施しをするときは、右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい。6:4 あなたの施しが、隠れたところにあるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」その精神です。

8節から主に教えられてきましたが、おもに教会内のことである6節から7節を確認しておきます。

**「12:6 私たちは、与えられた恵みにしたがって、異なる賜物を持っているので、それが預言であれば、その信仰に応じて預言し、12:7 奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教え、」**

預言は宣教の奉仕で、おもに牧師の役割です。これには、「信仰に応じて」という言葉が付け加えられており、「信仰の量りによって」とも訳されます。私が、皆さんに説教、宣教するとき、所詮は、私の信仰の範囲でしか語れないと言うことでしょうか。パウロは、そういう事を言わんとしているのではなく、私たちは、たいてい、自分の行いを測ろうとするとき、他人と比較します。あの人のようには出来ないとか、彼以上は出来るとかです。しかし、そういう人と比較ではなく、信仰の比較というとき、他の人との比較によって左右されることのない、全く別の量りが神によって与えられているということであり、その新しい量りによって自分を評価することができる、そのことを言っているようです。私の力ではなく、信仰によって与えられた神の力と言うことであります。「自分はこれでよいのだ」という過小評価、過大評価？でなく、自分の欠点、罪、そして悩みや苦しみがいかに大きくても、それによって、もう自分はダメだ、生きている価値がない、と絶望してしまうことのない、神がそのような自分を愛し、自分のために独り子主イエスが命を与えて下さった、その基準、その基準に応じて、自分を量り、語れと言っているようです。

そこには、自分は行けないという謙遜と、キリストはして下さったという信仰、私の力や基準ではなく、肉の限界を定めなくて、人と神に必要なに応じて、私には出来なくても、神には出来ると信じて、祈りつつ行う奉仕と言い換えることが出来るかも知れません。

そして、これは、ここで、預言だけでなく、あらゆる奉仕に共通した姿勢であることがわかります。預言における「信仰に応じて」は、あらゆる教会の奉仕を「恵みにに応じて」という言葉を加えることで、同じ姿勢で奉仕するように言われていることがわかります。私は、能力がありませんので、あの人のようにうまくやるが出来ませんから出来ませんではなくて、他にやる人がいないなら、信仰によってやらせていただきます。そのかわり、文句言わないでくださいね・・・ではありませんが、すこあし、誤解を恐れずの言い方になるかも知れませんが、**私基準では出来ませんが、**

**信仰基準なら、やらせていただくしかありませんね、それが、教会の奉仕の基準**だということですよ。

だから、お互いの奉仕を批判したり、比べることは出来ません。それぞれが、信仰の測りに従って行っていることが教会の奉仕だからです。教会の奉仕は、横の関係より、縦の関係の中で行われている、献身であり、仕える信仰のありかたそのものだと言うことでもあります。また、あの人と同じ事が出来なくてもいいと言うことでもあります。

さて、この週、教会の奉仕、そして、広く証として、隣人に仕えるボランティアを、主の志願兵として、主のあかし人として、この週、ここで示された主の奉仕の精神をもって出かけていくものでありたいと願います。